広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第60号　2011　51－58

元代の中日文化交流

― 入元僧と元代文人との交流から ―

包　黎　明

（2011年10月６日受理）

The Cultural Exchange between China and Japan in the Yuan Dynasty
― Into the yuan monk in yuan dynasty and the scholar's communication ―

Bao Liming

Abstract: China-Japan was no formal communication in the Yuan Dynasty, but maritime and monk that were leading non-governmental exchanges were prevailing. Monk got into the Yuan Dynasty and Japan by merchant ship, and they had became the backbone of cultural exchanges at that time. The main exploration is the cultural exchange between the monk and literati in this essay. Their communication was expressed by poems and song. Through these stories, investigate how these monks accessed the advanced country's culture at that time, and how to convey the culture of learning after returning. Finally this things is laying the foundation for Japan "gosann literature".

Key words：cultural exchange, the Yuan Dynasty, "gosann literature"
キーワード：文化交流，元代，五山文学

はじめに

中国元代，中国と日本の間では公的な交流はなかった。しかし，海商と僧侶が主導した民間交流はむしろ盛んに行われていた。商船を利用して入元する日本人僧侶，渡日する中国人僧侶たちがこの文化交流の主たる担い手になっていた。ふるくは木宮泰彦『日華文化交流史』から近年の榎本渉氏の『僧侶と海商たちの東シナ海』にいたるまで，この分野の研究は多くの蓄積がある。

当時，渡日した中国人僧侶には元の朝廷が派遣するもの（たとえば一山一寧）や日本政府の招聘によるもの（たとえば清拙正澄，明極楚俊）のほか，自ら日本へ行き，布教するものもいた（たとえば竺僊梵仙）。

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた.
審査委員：下向井龍彦（主任指導教員），三宅紹宣，竹村信治，畠中和生

彼らのもとに多数の禅僧たちが参禅する。

これに対して，数多くの日本人僧侶が元に渡った。『元史』[1] には「泰定三年（1326年）七月，日本僧侶瑞興らの四十人を日本へ復させた」という記載があり，また『雪村大和尚行道記』[2] に「本邦衲子，争先入元土」とあることから，当時の入元僧はかなりの数に昇っていたことがわかる。

日本人僧侶の入元の目的は禅宗の修得にあったが，それだけにとどまらず，広く文物，建築，書道，絵画などの諸学芸や諸技術の修得にも力を入れた。入宋僧の巡歴が臨安（現在の杭州）や明州（現在の寧波）などの寺に限られていたのに比べると，彼らが巡歴した地方は南は婺州（現在の金華），温州，福州へと，北方へは湖州，平江（現在の蘇州），集慶（現在の南京），大都（現在の北京）まで著しく拡大し[3]，交流相手は元の禅僧たちのほか，当時の元の宮廷官僚や文化人たちもいた。

これら元日両国の禅僧たちの交流と活動によって日

本では五山文学が興隆していった。鎌倉時代末から江戸時代のはじめにかけて，京都や鎌倉の禅僧によって厖大な量の詩文が創作された。その範囲は多岐にわたり，禅の法語をはじめ，詩文，日記，論説などの分野に及んでいる。

以上のような元日禅僧交流のなかで，本稿では特に入元僧と元の士大夫・文人らの文化交流を主に検討してみることにしたい。この分野の先行研究では江静氏の『元代文人与来華日僧交往初探－以元人馮子振「与無隠元晦詩」為例』がある。彼らの交流は主に詩歌を唱和する形で表現された。こうした交流の具体例をたどることによって，入元僧はいかに当時の先進国としての中国の文化と接し，帰国後この文化の伝達者としての役割を果たし，これが後の「五山文学」の基礎になることにつながっていくのかを検討してみたい。

なお本文で出典を注記していない文献については，末尾に掲示した参考文献を参照されたい。

第１章　元代の禅林文芸

比喩や婉曲な表現によって人の想像力をかき立て，連想を喚起するという共通する特徴により，中国の唐代から詩と禅は次第に結びつくようになり，宋代になると文人が禅を学ぶ現象はいっそう普及する[4]。一方宋代の禅宗は貴族社会に接近し，王臣の帰依を受け，また禅林の僧侶に貴族または官僚の出身者も出ることによって貴族社会の社交手段としての詩文の応酬が禅林に持ち込まれ，禅林文芸が生まれ，文学僧も出現する[5]。

日本の禅林文学には宋・元・明の三大系統があったが元朝系統の禅林文学はさらに古林派と大慧派に分かれていた。両派とも「当世」風（どんなものか簡単に説明する。技法なのか主題なのか）で，殊に大慧派は同時代の文豪との交流が盛んで，同時代文学に対して強い関心を示していた。

古林派は古林清茂（？～1329）に師事した禅僧たちのことであり，その気高く剛直な作風は貴族的な風情を漂わせ，作品のジャンルは偈頌であった。龍山徳見・石室善玖などの入元僧から義堂周信・絶海中津に伝えられ，日本の五山文学の本流を形成した。

大慧派は，儒家や官僚の一族から禅林に入った者が多いこと，科挙の受験者が多いことなどから，士大夫層との関係が深いことがわかる。すなわち大慧派禅林文学は，元代貴族社会において，士大夫層の社交手段，あるいは教養としての役割を果たしていたといえよう。したがって，作品のジャンルも偈頌だけでなく，彼ら文人・官僚の関心や趣向に応じたジャンルに広がり，詩をはじめ題跋・銘記・序賛のような世俗的な文に及んだ。大慧派の人々が愛読した詩文は古典よりもむしろ同時代の宋濂，趙孟頫，虞集などの詩文であった。日本では外護者がいなかったから，大慧派の継承者は中岩円月などの二三人に過ぎない[6]。

以上述べたような禅宗の貴族化・世俗化に伴って，元代になると高い禅学と文学教養をもつ禅僧は地方の文人と密接な交流をするようになり，寺院の環境を優雅な雰囲気で満たし文人を惹き付けた。文人たちのなかには，あえて寺院の中で学問を修める人さえ出て来たのであった[7]。

元代詩歌は延祐年間（1314～1320）を境にして前後期に分かれる。唐詩の風格を受け継いだ特徴は前期にすでにうかがうことができるが，後期になってからは唐詩を理想とする「復古」に新たな要素（「新変」）を加えた詩風になっていった。さらにモンゴルなど異民族の影響を受けて豪放な風格を加えるにいたる[8]。こうして虞集・揚載・範徳機・揭傒斯のいわゆる元の四大家が現れ，彼らは同時に宮廷の文臣として重きをなした。彼らの詩を五山（入元）僧はよく詠だという[9]。

日本からの入元僧は主に江南を拠点として活動したことから，主に江南の文壇に名を馳せた文人たちとの間で交流があった。そのことは，元代文人の詩文から多く確認できる。

ところでその交流の舞台がどのような場だったのか，明確に示すものは少ない。そこで日本禅宗の文学活動の場を手がかりに考えてみよう。日本禅宗の文学活動の場は「詩会」であった。詩会には「内衆の詩会」（内々の衆により開催される）と「友社の詩会」（一山・一寺内の僧衆または個別寺院を越えて志を一にする僧衆がつくる友社により開催される）があった。詩会の開催の次第は，まず主催者（→特別な表現があればそれで）が日時・場所・参加者などを決定し，参加者が指定された日時・場所に集まって詩会が始まる。詩会は請題（詩題の決定），作詩，評詩，余興の順序で進行し，余興で主催者が用意した馳走・宴会があり，その場のくつろいだ雰囲気のなかで評詩では言わなかった批評をしたり，自分の作風を披露したりした。時に兎太夫などの職業芸能者も加わることがあった[10]。

このような日本の詩会は入宋僧・入元僧が持ち込んだ中国禅林の作文サロンをモデルにしたものと思われる。おそらく当時の元の寺院の中でもこの詩会のような作文サロンがあり，そこに当代の文人たちが集まり，互いに飲酒唱和したのであろう。たとえば泰定２年（1325・日本暦：正中）に入元した中巌円月は，至順２年（1331・日本暦：元弘）年の秋，金華の智者寺に寄寓した。ある日，この智者寺の二老亭で当時の大詩

人薩天錫，賀九成が飲酒唱和して宴会が終わるとお茶会を開き，智者寺の僧たちも出席し，詩文を作った。円月がそのとき詠んだ詩の全文はもう覚えてないが「二老亭前会，三生石上心」が薩天錫に高く評価されたという[11]。こう見ると当時の文人と日本人僧侶の出会いは寺院の文芸サロン(詩会)であったことがわかる。

第２章　元代文人と入元日本人僧との交流

入元僧と元代文人との間の知的交流における表現方法は主に詩文の唱和であった。元代文人は禅僧と交流することを通して禅の思想や禅僧の表現方法に精通していたので，入元僧との対話や問答も高度な禅の思想と表現方法によって行うことが可能であった。

本章では，具体的人物を取り上げて交流の実態を明らかにしていこう。

１．馮子振と放牛光林

入元僧が交流した元代の著名な文人に馮子振（1253～1327 ？）がいる。馮子振は，現在の中国湖南省の出身で，官は集賢待制史（野に埋もれている逸材のスカウトを担当する役職）に至った宮廷官僚であった。字は海粟，号は怪怪道人といい，詩文，書画の分野でともに有名であり，元の代表的な文人であった。『海粟集』という詩文集を著したが，残念なことに散逸してしまっている。

元代文人馮子振が深く交わった元代禅僧に中峰明本（1263～1323）がある。二人が唱和した詩文集『梅花百詠』は後世に残る[12]。中峰明本は中国臨済宗の僧であるが，五山派の官寺に住することなく，各地に幻住庵という草庵を結び庵居したところから幻住明本ともいう。入元日本人僧の中には，中峰に師事した禅僧が多く，その法嗣は五山の住持となる叢林下の僧と五山といった官寺に住することを避けた林下派の僧に二分される[13]。馮子振から法語をもらった無隠元晦（？～1358）は中峰明本の下で参禅したことがある。

馮子振は元代禅僧の第一人者古林清茂（？～1329）とも深い交流があった。「古林清茂禅師語録」に馮子振が序を書いていることからわかる。古林清茂も臨済宗の僧であり，日本からも，筑前国出身の石室善玖を初めとして，多くの入元僧が古林のもとに参禅したことが知られる。当時の入元僧が競って師事した元代禅僧が中峰明本と古林清茂だったのであり，馮子振はこの二人と親交があったのである。

馮子振はこの二人と交流することを通じて彼らに師事する僧侶たちとも交流し，その中には日本人僧も含まれていたのである。

馮子振は多くの入元日本人僧のために墨跡を書き与えたらしく，今日，日本に残っている墨跡には，後述する「与放牛光林語」のほかに，中峰明本に師事した無隠元晦に与えた「与無隠元晦詩」（国宝，東京国立博物館蔵）および「与無隠元晦語」（重要文化財，五島美術館蔵），また，古林清茂に師事し，京都の長福寺の開山で知られる月林道皎（1293～1351）に与えた「保寧寺賦跋」（重要文化財，東京国立博物館蔵）が現存する。これら現存する墨跡からだけでも，馮子振と入元日本人僧との交流の深さが推察される。

馮子振が入元僧放牛光林に与えた『与放牛光林語』という詩文ある。今日，九州国立博物館に所蔵されており，1971年に重要文化財に指定されている[14]。

放牛光林（1289～1373）は，筑前国の出身で，鎌倉時代から南北朝時代に活躍した臨済僧である。文保２年（1318）に入元し[15]，正中元年（1324）に帰国した。帰国後は，万寿寺（豊後），建仁寺，天龍寺，南禅寺の住持をつとめ，晩年に，勝楽寺（筑前），龍祥寺（豊後）の開山となったと伝えられ，応安６年（1373）に死去した[16]。竜祥寺には放牛光林画像が伝存する（重要文化財）。光林とともに入元した同じ筑前国出身の石室善玖（1294～1389）の手になる賛をもつ。放牛光林の著作は伝わっていないから在元中の様子はよく分からないが，少なくとも古林清茂に師事していたことは確認できる。そして五山禅林外学の総帥として全叢林に多大な影響を与えたといわれる。このように学芸をもって天下に名を成し，義堂周信・絶海中津等がその門下に集まった[17]。五山文学の双璧といわれている義堂周信，絶海中津の学問に対する放牛光林の影響は否定できないだろう。

『与放牛光林語』の内容を見てみよう。

日本僧，自号林放牛．冲泊静閑，意趣不苟．方当梅子熟於呉苑，瞻匐香於蘇台，緑野微茫，青山嬾散．放牛，此際，以古鉢為芳草，以壊衲為眠簑．他日，露地驀牽蔗園，依旧還尋舶絵，不駕鞍騎．鈍鉄吹毛，償他舐犢．至是時臥取明月，吸他清風，三界外，別有町疃在．海粟老人，

法語は放牛光林の人格と禅を極めるために勤勉に励む様子を称賛したものである。馮子振が古林清茂が住する保寧寺を訪問したところ，放牛光林に出会い，この法語を贈ったのであろう。中峰明本と古林清茂の下に参禅した日本僧は多数あるがこのうちの何人かだけに法語を贈っている。これは確かな才能があったからこそ贈っているものであろう。

２．仲鋼□銛と元の詩人たち

丁復，虞集，鄭元祐ら元代に有名な詩人の詩文に名前が登場する入元僧がいた。名前は元側史料では「銛

仲鋼」。一般に四字僧名の禅僧の場合，たとえば○○□□を元側呼称通則では□○○と表記するので，「銛仲鋼」の正式僧名は「仲鋼□銛」（日本側史料に登場しないので□は不明）である。仲鋼□銛の経歴や事績を日本側の史料で確認することは出来ない。

丁復から送別の詩を送っているから日本へ帰国しようとしたことは間違いないが，その途中で何かあって帰国できなかったか，それとも帰国をやめたのではないかと考えられる。

榎本涉氏は，仲鋼が帰国しようとした1330年代後半は，日本人僧の入元・帰国例が確認できない時期であり，当時在元していた日本人僧は帰国したくてもできない事情があったと推測され，その事情が，1335年ごろに起こった元統「倭寇」事件を契機に日元貿易が断絶したことであったことを明らかにされた[18]。仲鋼はこの事情によって，帰国を断念せざるを得なかったのであろう。

仲鋼が交流した丁復（約1272～約1338）は字仲容，天台（浙江東中部）人で有名な詩人である。当時の人々に李太白に例えられていた。延裕年間（1314～1320）の初め，大都に行き，その才能が公卿の気に入られ，館閣（図書経書と国史の編修などの事務を掌る役所）に入ったが願いを叶えることができず，南へ下り，金陵（現在の南京）に住した。家の前に二本の檜があり，よくその木にもたれ吟詩したという[19]。著作に「檜亭集」というのがあり，この中に「天寿節龍翔寺習儀・次韵銛上人」，「次韵銛上人龍河月夜謾興二首」，「送銛仲鋼之呉中・兼東柯敬仲博士」，「扶桑行送銛仲鋼東帰」など，銛仲鋼に贈った数多くの詩が収められている。

これら一連の詩から，仲鋼の経歴，丁復との交流の深さを知ることができる。まず「扶桑行・送銛仲鋼東帰」の

上人何年来，瞳人正碧髪未蒼．詞句所發，如衆妙香，自言讀書在扶桑．慕法五天竺，十七來錢唐．十八姑蘇住，浩歌濯滄浪．問劍虎丘石，挂席楓橋霜．古臺吟鳳去，新寺訪龍翔．振衣香爐顛，洗鉢三石梁．天上歸來虞閣老，留之廿日掃室置禪床．笑謂門生及兒子，海國有此圭與璋．一一作歌送，彷彿扶桑之故鄉．

の一節から仲鋼の経歴の一端がわかる。

仲鋼□銛は十七歳のときに錢唐（現在の杭州）に来て，その翌年に姑蘇（現在の蘇州）に入り，虎丘の雲巌寺に滞在する。そのあと保寧寺（南京の鳳凰台にある），元文宗が建立した集慶（南京）龍翔寺[20]と遍歴する。その次に廬山（江西）に行き三石梁に鉢を洗っている（教えを請うている）。この江西に滞在していたとき，帰郷した虞集と出会い虞集から送別の詩をもらっている。「扶桑行・送銛仲鋼東帰」には「往年上人去，我在雲上不得見，前年上人歸，我方僦宅園中央。」ということから仲鋼□銛は江西から金陵に帰ってきてそれから日本へ帰国しようとしていることが分かる。

虞集（1272～1348）は，元代の有名な学者，詩人である。本籍は四川であり，南宋滅亡後崇仁（現在の江西省にある）に移った。彼は大都に行き儒学教授，国子助教，翰林直学士，奎章閣侍書学士などを歴任したが，元の皇帝文宗が亡くなった（至順三年八月1332年）後，病を称し帰郷する[21]。

虞集の『道園学古禄録』巻二に「送海東銛上人十首」が収められている。これらの詩から，仲鋼が禅を極めるために遠くから中国に来て各地を遍歴し，禅を極めて（「百錬成利器」）帰国して日本人に伝えよう（「帰報日邊人」）という強い意志に敬服していたことが分かる。前掲した丁復の詩によれば，帰郷した虞集は室を掃除して禅床を置き，仲鋼を20日間招待したところ，仲鋼の人品について門生と息子に「海國有此圭與璋」と言っている。圭璋というのは貴重な玉製器物で高尚な人品をたとえる意味であるから仲鋼の人品に魅せられたことが分かる。

ほかに仲鋼□銛と交流があったとみられる詩人に鄭元裕（1292～1364）がいる。遂昌（現在の浙江省）の人で，後に呉中（現在の蘇州）に移る。彼は当時においても後世の人からも呉中士人の代表として扱われている。至正17年（1357）に平江路儒学教授に任命されるが一年で辞任した。彼が仲剛や他の日本人僧に贈った詩に「送銛仲鋼遊金陵」，「贈日本僧」，「題夷僧写蘭巻」がとある[22]。仲鋼に贈った詩から，各地を遍歴する厳しい禅の生活を送っている逞しさと高い禅の境地に至っているのに感心していることが伝わってくる。

仲鋼□銛が元統「倭寇」事件を継起とする日元貿易の断絶によって日本に帰国できなかったことは，日本における五山文学の発展にとって大きな損失であったと思われる。彼が帰国していたら，五山文学は違った展開をしていたかもしれない。

3．王逢と得中□進

王逢（1319～1388）は，元・明交代期の詩人で江陰（現在の江蘇省江陰）の人である。豊かな才能に恵まれ，ある宮廷高官がその才気を惜しんで官職に推薦するが，病を理由に断ったという。著作には『梧渓集』，『詩経講説』，『杜詩義本』などがある[23]。

王逢が日本人僧に送った詩文が『梧渓集』に収められている。「題日本嶺大徹上人眇海軒」，「送日本僧得中遊廬山」，「日本進上人将還郷国　為録予所注杜詩本義留旬日贈以八句」，「寄題日本国飛梅・有引」など

である。

このうち「日本進上人将還郷国　為録予所注杜詩本義留旬日贈以八句」には，「進上人」という日本人僧との交流が具体的に書かれている。「進上人」と「得中」と「進得中」は同一人物であると思われ，元側の呼称通則から，僧名は「得中□進」となろう。後述するように大宰府安楽寺僧であったと推定される。

重訳帰看母，僧中独尓能，上方雲一鉢，滄海月千燈，雀舳蒙冲艦，龍函最上乗，杜詩書法隠，母惜授諸藤（藤其国中著姓）

詩文にみえる杜詩は杜甫の詩を指している。王逢は杜甫の詩を注釈して『杜詩義本』を著していたが，日本人僧「得中□進」は帰国する前に10日間も王逢のもとに逗留して『杜詩義本』を書写し，王逢はその間に八句の詩を作って得中□進に贈ったというのである。この10日間，王逢と得中□進はおそらくいろいろと日本について話をしたのだろう。菅原道真を祀る大宰府安楽寺の僧であった得中□進は，道真を日本随一の学者として敬愛しており，王逢との談話のなかで，杜甫にも匹敵する日本を代表する文人として菅原道真の逸話を紹介したものと思われる。王逢はその逸話に興味を示し，「寄題日本国飛梅　有引」という詩を書いている。

「寄題日本国飛梅　有引」

国相管北野者，剛直有為，庭有紅梅，雅好之，一日被誣謫宰府，未几梅夜飛至北野，卒死，謫所国人立祠，梅側僧進得中云，

瘴日雲霾不放帰，精神解感禹梁飛，水香霞艶渾无恙，瘦比累臣帯減囲.

詩の内容は，日本の大臣菅原道真（「国相管北野」）は剛直で有能であった。道真は邸宅の庭に紅梅を植えてこの紅梅をこよなく愛でていた。ある日，讒言にあって大宰府に左遷されることになったが，まだ咲いていない梅もその夜に北野に飛んでいった。道真は死んだ後，その国の人々は祠を建てた（北野天満宮のこと）。安楽寺僧得中□進は，讒言のため自分の故郷に帰られなかった道真であるが，彼の精神は人々を感動させていると語った，というものである。菅原道真は学問の家に生まれ，大臣にまで登りつめたが左大臣藤原時平の圧力によって昌泰４年（901），大宰府に左遷され，失意のうち２年間をすごし，延喜３年（903）になくなる。その遺骸を牛車に乗せて運んだが牛が動かなくなり，そこで埋蔵したと伝えられる。その地が現在の太宰府天満宮である[24]。道真と紅梅の逸話は道真の京都の邸宅に植えられていた梅が，道真のあとを慕って一夜にして大宰府に飛んできたという[25]ものである。王逢の詩に描かれた道真の逸話は，やや正確さを欠いてはいるが，親交ある入元僧から聞いた日本を代表する詩人道真の逸話が，元代詩人の印象に焼き付けられ題材として取り上げられているところに，元と日本の詩人たちの交流の深さがうかがえる。

詩中に「梅側僧進得中」とみえる「進得中」が「進上人」のことであり，「梅側僧」といっていることから大宰府安楽寺の僧であったと思われる。こうしてみると，王逢は「得中□進」から聞いた道真の運命に，同じ文人として同情を寄せ，作詩したものと思われる。「得中□進」も日本側の史料でその活動を跡づけることはできない。仲鋼と同様に帰国することができなかったのであろう。

このほか，張以寧（1300～1369）の「題日本僧雲山千里図」[26]，成元章（年代不詳）の「題倭僧所画菖蒲小景四首」[27]，倪瓚（1301～1374）の「題日本僧画」[28]などがある。これらの詩は，元の文人等が日本人僧の描いた絵を批評して作った詩である。前章でみた禅林を舞台に禅僧・文人が集う詩会のような文芸サロンでは，詩作だけでなく絵画制作も行われ，詩の批評だけでなく絵画の批評も行い，その批評がまた詩の題材になっていたことが読む取れる。その文芸サロンには入元日本人僧も加わり，元の詩僧・文人たちは，自分たちの作風とは趣を異にするエキゾチックな作風・題材に心打たれたのであろう。

残念ながら以上書いた詩文の主人公である入元僧はほとんどが日本側の史料にまだ確認できていない状態である。帰国しなかったか，帰国したが著作類が伝わってないなどの複雑な事情が推測されるが，このように入元僧と当時の元代の士人の間には密接な交流があったことはもっと評価すべきであると思う。詩文の題材として取り上げられた交流の背後に，記されることのなかった数多くの親交が，元代文人と入元僧との間で深められていたことが想定されるのである。

第３章　入元僧の詩文

入元僧は入唐僧や入宋僧のように政府や所属寺院から旅費などが支給されることはなく，修学する滞在地で托鉢したり物乞いすることによって得たわずかな資金で遍歴した。彼らの滞在期間を見ると平均して10年内外を普通とするが[29]，中には龍山徳見の45年，雪村友梅の22年，古源邵元の21年というように長く在元した例も少なくない。

入元僧は元の五山十刹を遍歴し，元の有名な禅僧たちの下で禅を修得するほか，また江南の景色を遊覧し，

前章で検討したように当時の士大夫，文人らとも交流を深めた。ここで雪村友梅を取り上げて検討してみたい。

雪村友梅は，正応３年（1290）に越後国白鳥郷に生まれた。父は当郷の土豪一宮氏（源姓）。幼い頃に何年間か鎌倉建長寺で帰化禅僧一山一寧に侍童として仕えており，この時期に一山から中国語を勉強したものと思われる。徳治２年（1307，元年号で大徳11年）に18歳で入元し，２年間，大都（北京）周辺の各地を遊覧・観光したのちに，湖州道場山万寿寺の叔平□隆に師事する。雪村の博学多識ぶりは，外国人であることが気づかれないほどであったという。だが間もなく日本人僧はスパイの疑いをかけられ次々に逮捕され，雪村も雲州で投獄された[30]。彼らが逮捕・投獄されたのは，至大２年（1309，日本年号で延慶２年）に貿易管理を担当する官僚の不正行為に不満を持つ倭商が慶元を焼くという事件が起こり，日本人に対する警戒が強まったことが原因である[31]。叔平も雪村を匿った罪で逮捕されて獄死した。雪村も危うく処刑されかけたが，とっさの機転で元の高僧無学祖元の「幻剣頌」を朗誦して執行吏を畏服させ，死刑を免れ長安へ配流されることになった。それ以来，江南地域では「臨剣頌」を雪村の作と伝えられていると，数十年後に同地を訪れた中巌円月は記している[32]。

雪村は長安で３年間の流謫生活を過ごしたのち蜀（成都）へ移送され，この地で10年間過ごした。この間，経書・史書を渉猟し，多数の詩を創作した。これを集めた詩集が『岷峨集』である。大赦によって赦された後，長安にもどってまた３年留まり，長安南山翠微寺に住し，元の朝廷から宝覚真空禅師の号を賜与された。その後天下の名山古跡を周遊し，元徳元年（1329）帰国した。

在元中，雪村は様々な人々と交流があったことがこの詩集からわかる。交流の相手に禅僧はもちろん，当時の文人，隠者，士大夫などもあった。

雪村が入元して間もなく，当時の元代の文壇で有名な趙孟頫（1254～1322）に出会う。

趙孟頫は字を子昂，号を松雪といい，浙江呉興の人である。彼は南宋貴族の身分でありながら元の宮廷の官職に就き，一品まで昇った。彼は書家と画家としても有名であり，雪村が入元したとき，趙孟頫の官職は行浙江等拠儒学提挙であった[33]。儒学提挙は一省の儒学を主管する職務であり，浙江省の儒学提挙が事務を執る場所は杭州であった。雪村は入元後２年間は観光したというから，多分この景勝地で趙孟頫に出会ったのだろう。このとき雪村は趙孟頫に，唐の書家李邕の筆法で字を書いて見せて驚かせ，帰りに大きな墨を贈られたという[34]。

当時の中国の士大夫や文人の間では送別や会見の詩文を作り唱和する習慣があった。雪村もこれに習い，蜀にいた10年間，出会った様々な人々に関して詩文を作った。その中の「周教授　盛夫」をみてみよう。

余本不羈人，足迹窮禹甸，所至訪奇古，会心輙所便，
閲士如堵墻，眼中无貴賤，孫楊馬空群，奔逸誰可羨，
剣南已三春，興尽留何恋，頃自錦城東，鷁泛渝江瀑，
龍灘水滔滔，鳳嶺云片片，崖城連石郭，愛古云安県，
挈包聊借榻，蕭索西禅院，稔聞盛夫名，来見盛夫面，
全徳崑岫玉，美才会稽箭，茂叔多云仍，如公能几見，
光風霽月間，談論集飛散，冷官初発軔，翰院終当荐，
愿言行所学，澆漓霽一変，作詩扣文庭，中慙非精煉.

雪村は蜀の各地を遍歴して渝江（重慶）に来て，普段から名前をよく聞いていた周盛夫を訪れ談論を交わしてその学才を「全徳崑岫玉，美才会稽箭」と賞賛し，これぐらい才能を持っている人は翰林院（国史の編修，文書の起草などをするところで国家の人材を貯蔵するところ）に推薦すべきであると書いてある。

このほかに「寄別李公書」，「寄趙彦清」，「和陳良臣詠竹之贈」，「和河汉弼寄韵二首」，「再次毛懿甫苔字韵」などの詩がみられる。彼が当時に知り合った「李公」，「趙彦清」，「和陳良」，「河汉弼」，「毛懿甫」ら文人や士大夫の詳細について，今のところまだ確認できてないが，その内容からみるとかなり著名な文人たちであったと思われる。このような詩文の唱和によって雪村の漢詩文の技法や表現がよりいっそう磨かれ，上達したに違いない。

彼の『岷峨集』に「鐫匠求詩」という詩がある。鐫匠とは彫刻の職人のことで，中国のある彫刻職人から詩作を請い求められた雪村は，職人が彫刻した作品の方が描いた絵よりも上手であるという内容の詩である。これをみると雪村は蜀にいる間に，詩作にすぐれた日本人僧として，当地の禅僧・文人の間で有名になっていたことをうかがうことができる。

おわりに

木宮泰彦氏が調べたところによれば，入元日本人僧の数は222人に達している。実際の数はこれよりも多かっただろう。禅僧であることから，当然ながら入元して元の有名な禅僧に師事し，禅寺・禅界を主な活動圏にしたのである。

しかし，彼らの活動圏がそれだけにとどまっていないことは，本論で検討した内容からわかるだろう。残念ながら，私は雪村友梅のほかの入元僧の著作からは，

まだ元代文人との交流の様子を見つけきれていない。その要因として，放牛光林のように後世に著作が残っていない入元僧，仲鋼□銛のように帰国していない僧などもあろうが，突出した少数の入元僧を除く多くの入元僧は禅宗修学に専念し，詩作の主題にするほどには元の文人と親交を深めてはいなかったのかもしれない。しかし日本禅林文学の中の元朝系統に属する大慧派は同時代の文豪との交流が深かったことは本論で述べたところであるが，この派の禅僧に師事した入元僧に対しては，同時代の文人たちが一層強い影響を与えたと思われる。

以上，本論でみてきたように，入元僧と元の文人との交流は主に詩文を唱和する形で表現された。入元僧は江南を主たる修行の舞台としつつも，ユーラシア大陸に跨るモンゴル帝国の支配下にあった各地を，元帝国の保護下（監視下）で遊覧・観光・居留することを通して，活気に満ちたユーラシア文明交流の息吹を肌で受け止め，その息吹のなかで発展した元代禅宗と元代修辞学（詩学）を貪婪に吸収して自分の漢文，詩学を磨き，上達したのである。彼らの中に雪村友梅や放牛光林のように，帰国後は多数の日本人禅僧を弟子とし，また同輩の禅僧たちとの交流を通じて，自分が元で学んだものを有形，無形に伝達したであろう。特に後に五山文学の双璧といわれる義堂周信や絶海中津らが放牛光林と接触していたことから，入元僧は元代詩学の伝達者として，後の「五山文学」の基礎を築いたということができるだろう。

【注】

1）以下,『元史』（宋濂ほか撰）は中華書局版『元史』（1976年）を用いる。
2）上村観光編纂『五山文学全集』第１巻：詩文部第１「雪村大和尚行道記」思文閣，1992
3）木宮泰彦『日華文化交流史』（下）471ページ，富山房，1955
4）張文宏「禅宗与日本五山文学」（『仏山科学技術学院学報（社会科学版）』22巻第６期，15～18ページ，2004年）
5）玉村竹二『五山文学：大陸文化紹介者としての五山禪僧の活動』54ページ，至文堂，1955
6）玉村竹二『五山文学：大陸文化紹介者としての五山禪僧の活動』93ページ，至文堂，1955
7）毛陽光『元代寧波的歴史文化』160ページ，中国文連出版社，2008
8）桂栖鵬，楼毅生等著『浙江通史』元代巻，237ページ，浙江人民出版社，2005
9）吉川幸次郎・黒川洋一『中国文化史』322ページ，岩波書店，1978
10）朝倉尚『禅林の文学－詩会とその周辺』10ページ，清文堂，2004
11）中巖円月「文明軒雑談上」『東海一漚集』巻４，玉村竹二編『五山文学新集』東京大学出版会，1967～1981
12）（清）顧嗣立『元詩選』三丙集世界書局，1962
13）西尾賢隆『中世の日中交流と禅宗』67ページ，吉川弘文館，1999
14）『日本歴史』2010年４月号（743号）口絵（丸山猶計解説）
15）「景南和尚語録附法観寺一件」に「建仁三十三代祖師光林，字放牛，筑前人也，嗣法千光六世之孫闡提，文保二年戊午冬十月乗船至于温州，正中元年甲子帰朝，応安六年癸丑八月九日示寂.」とある。東京大學史料編纂所編纂『大日本史料』６編38冊37頁，応安６年８月９日条東京大學出版會，1968
16）『東山塔頭略傳』「霊応山法観寺」に「放牛，名光林，得法後，入元参詢，帰国後歴任豊後州万寿・建仁第三十三世・天龍第五世・南禅大廿六世・後住常在光寺，又豊後州狭間城主大友直重，創積翠山龍祥寺，請師為開山祖師，寂後立塔扁光明蔵，又竺僊禅師称師為泰平開山，泰平不詳何処.」とある。東京大學史料編纂所編纂『大日本史料』６編38冊38ページ，応安６年８月９日条東京大學出版會，1968
17）玉村竹二『五山禮僧傳記集成』595～596ページ，思文閣，2003
18）榎本渉『東アジア海域と日中交流』第２部第１章（吉川弘文館，2007年）
19）「桧亭集」四庫全書珍本，商務印書館，1971
20）「金陵梵刹志」に「鳳山天界寺：在都城外南城鳳山離聚宝門二里，旧名龍翔集慶寺，在城中閃橋北，文宗即位詔以金陵潜宮改建。国朝洪武二十一年寺災，勅徒城南圓寂処，與民居不相接出内帑大建刹宇更名天界寺.」とある。藍吉富主編『大蔵経補編』29華宇出版社，1985
21）（清）顧嗣立《元詩選》世界書局，1962
22）『北京図書館古籍珍本叢刊』集部・元別集類95「僑呉集」書目文獻出版社，1988
23）（元）王逢撰『梧渓集』四庫全書珍本，商務印書館，1971
24）九州国立博物館編『国宝天神様－菅原道真の時代と天満宮の至宝』特別展174ページ，西日本新聞社西日本鉄道，2008
25）大宰府市ホームページ http://www.city.dazaifu.fukuoka.jp/index.html
26）（明）張以寧撰『翠屏集』四庫全書珍本，商務印

書館，1971
27）（元）成廷珪撰『居竹軒詩集』，四庫全書珍本商務印書館，1971。生年については王逢の『梧渓集』に：「丁復と前後日に生まれた」とに書かれてあることから生年は約1272年であろう。
28）『北京図書館古籍珍本叢刊』集部・元別集類95「清閟閣全集」
29）木宮泰彦『日華文化交流史』（下），477ページ
30）『雪村大和尚行道記』上村観光編纂『五山文学全集』第１巻，思文閣，1992
31）榎本渉『僧侶と海商たちの東シナ海』講談社，2010
32）中巌円月「藤陰瑣細集」『東海一漚集』巻４玉村竹二編『五山文学新集』東京大学出版会，1967～1981
33）『元史』巻172列伝59
34）『雪村行道記』上村観光編纂『五山文学全集』第１巻，思文閣，1992

【参考文献】

（明）宋濂［ほか］撰『元史』中華書局，1976
（清）顧嗣立編『元詩選』世界書局，1962
（元）丁復撰『桧亭集』四庫全書珍本，商務印書館，1971
（元）虞集［著］『道園学古禄』臺灣中華書局，1965
『北京図書館古籍珍本叢刊』集部・元別集類95「僑呉集」書目文獻出版社，1988
『北京図書館古籍珍本叢刊』集部・元別集類95「清閟閣全集」書目文獻出版社，1988
（元）王逢撰『梧渓集』四庫全書珍本，商務印書館，1971
（明）張以寧撰『翠屏集』四庫全書珍本，商務印書館，1971
（元）成廷珪撰『居竹軒詩集』四庫全書珍本商務印書館，1971
藍吉富主編『大蔵経補編』29「金陵梵刹志」華宇出版社，1985
九州国立博物館編『国宝天神様－菅原道真の時代と天満宮の至宝』西日本新聞社　西日本鉄道，2008
東京大學史料編纂所編纂『大日本史料』東京大學出版會，1968
上村観光編纂『五山文学全集』思文閣，1992
榎本渉『東アジア海域と日中交流』吉川弘文館，2007
榎本渉『僧侶と海商たちの東シナ海』講談社，2010
木宮泰彦『日華文化交流史』富山房，1955
玉村竹二編『五山文学新集』東京大学出版会，1967～1981
玉村竹二『五山禮僧傳記集成』思文閣，2003
玉村竹二『五山文学：大陸文化紹介者としての五山禪僧の活動』至文堂，1955
西尾賢隆『中世の日中交流と禅宗』吉川弘文館，1999
吉川幸次郎・黒川洋一『中国文化史』岩波書店，1978
朝倉尚『禅林の文学－詩会とその周辺』清文堂，2004
陳高華・張帆・刘曉著『元代文化史』广東教育出版社，2009
毛陽光『元代寧波的歴史文化』中国文連出版社，2008
陳小法，江静『径山文化与中日交流』上海辞書出版社，2009
桂栖鵬，楼毅生等著『浙江通史』（元代巻）浙江人民出版社，2005

【参考ホームページ】

太宰府天満宮ホームページ
http://www.dazaifutenmangu.or.jp/shiru/plm_led.html